

薬局に併設

個性的な「本屋さん」

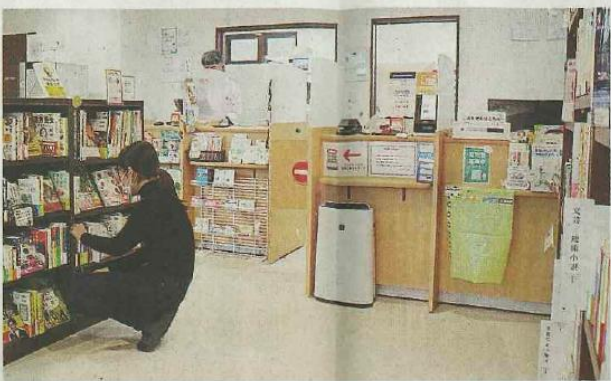
地域住民が集まる場に

ネット通販や電子書籍の普及により、全国で書店の閉店が相次いでいる。一方で県内では、異業種の企業が店舗内に併設したり、会社員が副業として経営する個性的な書店が存在感を増す。地域に根づき、人々が集まる場になった2店舗を紹介する。

患者との関わり重視

徳永薬局若宮店（韮崎市若宮一丁目）は、漫画以外の新刊書籍約1000冊を扱う書店の顔も持つ。同店の管理薬剤師・小松聖さん（26）は「地元住民の憩いの場として役に立ちたい」と話す。

同社はグループ会社も含めて関東圏を中心に約70店舗、県内では4店舗を展開。このうち若宮店は昨年4月に開業した。



約1000冊の新刊書籍を扱う徳永薬局若宮店。多ジャンルの新刊が並び、フリースペースも設けている

同社によると「薬を提供するだけでなく、地域の人々が気軽に立ち寄れる場所にしたい」との思いから、東京・代官山の滞在型書店から発想を得て、店内に書店の機能を持たせた。併せて、コピー、緑茶などを提供。コンセントを完備したフリースペースも設けている。

同社経営サポート本部の酒匂博光本部長（42）は「薬局の生き残りが難しいなか、異業種を組み合わせて初めの試み。調剤薬

局のイメージを覆すモデル店として、挑戦する姿勢を大事にしたい」と話している。

オープンから約10カ月。珍しさから認知度は高く、評判も上々という。周辺には、内科、消化器外科、整形外科、皮膚科などが立地。混み合う待合室を避け、診察まで同店で過ごす患者もいる。

一方で、書店のみの利用が増えるなど、薬が目的ではない立ち寄りが多くなることへの懸念もあるが、小松さんは「調剤だけでなく、書店や喫茶などさまざまな形で患者と関わることでアドヒアランス（患者が治療方針を理解・納得し、積極的に治療に参加・継続すること）の向上にもつながる」とメリットを強調。同店では感染症対策をはじめ、薬を出す際、個人情報や病名がほかの来店者に伝わらない配慮を徹底しているという。現在、小松さんの出身地である福島

県の物産品の販売もしている。今後、さまざまなサービスを展開したい考えだ。

山梨新報

2026年(令和8年) 第3430号

1月16日

(毎週金曜日発行)

発行所 ©山梨新報社

〒400-0864甲府市湯田二丁目9-8

(UTY 会館内)

☎055-237-8121 ㊟055-237-8142